

社会 6年A組	外務大臣“陸奥 宗光”	片桐 宏
--------------------------	--------------------	-------------

1. 単元について

(1) 単元設定の理由

小学校の歴史学習は、人物の働きや代表的な文化遺産を中心として学習がすすめられる。特に人物学習については、各時代に活躍した人物が社会の発展のためにどのような働きをし、その時代の社会的課題に対してどのようにかかわったのか、その人物の生き方や業績を学習することによって、子ども達が歴史に共感をもって接することができるように学習の工夫をすることが求められている。学習指導要領には、我が国の国家・社会の発展に大きな働きをした代表的な人物を、政治、文化などの分野から、42人の人物が例示されている。その中から、和歌山市出身の偉人の一人であり、「カミソリ大臣」と称される『陸奥宗光』を学習対象の中心として位置づけ、明治時代の学習をすすめようと考えた。

学校の近くの小松原五丁目の交差点には、彼の生誕碑があり、子ども達にもなじみが深い岡公園には、銅像が建立されている。明治時代の条約改正や日清戦争の際の外務大臣として活躍した『陸奥宗光』を取り上げることにより、彼の願いや果たした役割などを多面的に考えさせ、その活動を通して彼の生きた時代の様子を具体的に理解させたいと考えた。また、激動の幕末～維新を駆け抜け、明治政府の中枢に加わり、日本の近代化を推し進めた彼の業績に触れることで、当時の日本のおかれていた状況を理解させたいと考えたのである。



本単元における「意味と内容」とは、“日本外交の基礎をつくった陸奥宗光の業績や生き方を知る中で、陸奥宗光の人となりを考えること”と位置づけた。彼の生き方や人がらなどに触れ、将来の自分自身の生き方に反映させて考えることが、「意味と内容」のひろがる学びであると考えたのである。本単元では、幕末から条約改正や日清戦争に至るまでの『陸奥宗光』の足跡を調べ、その人物像（生き方や人がら）を探った。明治維新時、『陸奥宗光』は薩長藩閥政府の現状に憤慨し、官を辞した。一時故郷の和歌山に帰り、津田出らとともに和歌山藩の改革にも尽力する。その後、外務大臣になり活躍するのである。常に大きな視野に立ち、日本の将来を考えていた彼の人となりに触れることで、自分自身の未来へとつなげていける学習を展開したいと考えたのである。同時に彼の生きた時代が、近代日本の骨組みが徐々に組み上がっていく過程であることも捉えさせたかった。

(2) 単元目標

- ・『陸奥宗光』の生き方に触れることにより、自分自身をよく見つめ、人間としてよりよく生きようとする態度を養う。
- ・『陸奥宗光』をはじめとする多くの人々の努力と、国力の充実、国内世論の高揚、世界情勢の変化などにより、幕末に結ばれた不平等条約が改正されたことを理解する。
- ・『陸奥宗光』の政治家としての業績を、資料を活用しながら歴史的な事実や事象と関連づけて調べ、まとめ、発表したりすることができる。
- ・欧米諸国と対等な立場になった日本が、日清戦争、下関条約から三国干渉、その後の日露戦争への流れを、日本と外国との関係や世界の動きの中でとらえることができる。

(3) 単元計画 《 全14時間 : (本時 13/14) 》

第1次 和歌山の偉人『陸奥宗光』の生誕碑や銅像を探そう。(1時間)
 ・岡公園の銅像 ・小松原五丁目交差点の石碑

第2次 『陸奥宗光』の生い立ちや業績について調べよう。(3時間)

父は紀州藩勘定奉行、伊達宗広。

江戸に出て、尊王攘夷運動に加わる。

坂本龍馬の「海援隊」に参加。龍馬暗殺。

反政府運動に加わった罪で、“5年の刑”を受ける。

神奈川県知事・地租改正局長となる。

藩閥政府に不満。役人を辞職する。


外務省中米公使。ノルマントン号事件。

イギリスとの不平等条約の改正(治外法権の撤廃)に成功。

外務省内に銅像が立てられる。(歴代外相でただ一人)

の生い立ちや業績を調べよう

『陸奥宗光』



紀州藩の政争の中で、苦勞した幼年時代。宗光も和歌山から追放される。

明治新政府で外国事務局御用係となる。

和歌山藩での藩政改革。プロシヤ式の近代軍事国家を計画。

ヨーロッパに3年間留学。

伊藤博文内閣の外務大臣となる。

陸奥外交と日清戦争。下関条約・三国干涉。

◎書籍やインターネットなどの様々な資料から調べる。エピソードも取り上げさせたい。

第3次 調べたことを発表しあい、新たな課題を決めよう。
 『陸奥宗光』年表や人物関係図にまとめよう。(3時間)

◎発表の中で、疑問に思うことやもっと調べてみたいことを決める。

第4次 『陸奥宗光』外相は、どうして条約改正に成功したのだろう (2時間)

◎ノルマントン号事件を通して、国民世論の盛り上がりに触れる。

◎日本にとって、条約改正交渉が有利に運ぶことが予想されたイギリスを選んだ世界情勢の把握力を考えさせる。

第5次 『陸奥宗光』外相は、日清戦争～三国干渉のことを
どのように思っていたのだろう。

(2時間)

- ◎日清戦争について、原因と結末と下関条約について調べる。
- ◎三国干渉のもつ意味について考える。

第6次 『陸奥宗光』について話し合おう。

(2時間)

《本時2/2》

- ◎『陸奥宗光』の生涯を通しての生き方を考える。
- ◎『陸奥宗光』の思いや願いを出し合う中で、明治の外交問題や時代背景を考える。
- ◎『陸奥宗光』の生き方から、将来の自分自身の生き方を考えるようにする。

第7次 明治の『陸奥宗光』新聞をつくろう。

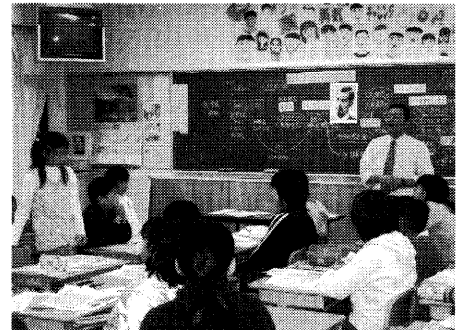
(1時間)

- ◎郷土出身の偉人の業績や彼の生き方をまとめた新聞をつくる。

2. 単元の考察

(1) こどもが「意味と内容」をひろげた場面

本単元における「意味と内容」は、“日本外交の基礎をつくった陸奥宗光の業績や生き方を知る中で、陸奥宗光の人となりを考えること”と位置づけた。また、彼の生き方や人がらなどに触れ、将来の自分自身の生き方に反映させて考えることが、「意味と内容」のひろがる学びであると考えたのである。まず、彼の生い立ちや業績について調べていった。業績については、教科書や資料集に「不平等条約の改正」・「日清戦争および下関条約」は記載されている。しかし、彼が活躍する原動力となった彼の生き方や考え方を知るために、生い立ちや詳しい業績を調べる必要があったのである。第3次では、ひとり学習で調べたことを全体の場で発表し合った。『陸奥宗光』の生い立ちや業績を中心に話し合ったが、彼の人生の支柱となっている“苦労話”や人柄・性格に及ぶ内容のものもいくつかあった。自分が調べたことをみんなの前で伝え、知らないことに驚き、「そんなことをよく調べたなあ。」・「あんなことあったんや。」と気づくことで自分の考えや思いが更にふくらんでいった。友達の考えを聞く中で、まなごしをお互いに共有していった。また、一人ひとりが調べ学習をすすめていく中で、彼の生きた時代(明治時代)の日本のおかれていた立場や世界の情勢についても考えを深めていったのである。



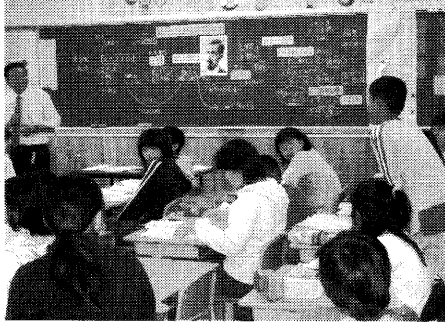
◎『陸奥宗光』の業績以外のことで出されたエピソード

- ・和歌山で生活していた子どもの頃、本屋の店先でよく立ち読みしていた。(勉強熱心)
- ・九度山で生活していた頃、アルバイトをして家族を助けていた。(家族思い)
- ・江戸に出た頃、人の間をすり抜ける練習をしていた。(逃げの稽古、武道は大の苦手)
- ・身体が弱く、肺に病気があった。肺が悪かったのに外務大臣を引き受けた。(頑張り屋)
- ・よく居酒屋で、店先にある魚の煮付けの裏側半分をだまって食べていた。(ずる賢い)
- ・ハングリー精神がかなりあった。(苦労してがまん強い)
- ・坂本龍馬が暗殺された時、大声で泣き叫んだ。そして仕返しにいった。(友達思い)
- ・監獄の中やヨーロッパに留学したとき、猛勉強した。(勉強熱心)
- ・奥さんや子どもによく手紙を出していた。(家族思い)

本時では、彼の業績を根拠にしながら、多面的・多角的に『陸奥宗光』の人となりや生き方について話し合った。子ども達は、彼の人となりや生き方に対して様々な捉え方をしていた。多くの子ども達は、『陸奥宗光』を“すごい人”と捉えていた。歴史上に名を残す『陸奥宗光』

なら当然である。歴史学習で人物を取り上げる場合、その人の生き方や考え方について自分なりに、「自分ならどうするか。」「少しでも真似できないか。」などと考えて、自分自身の生き方にも目を向けさせることも大切だと考えた。また、子ども達が生まれ育った“和歌山市の偉人”として誇りを感じさせたかった点も忘れてはならない。

(2) 互いのまなざしが共鳴する実際の姿は



子ども達が最初に持った疑問を、調べ学習の中で答えを見出す。どうしても自分の力で解決できない疑問が出てきた場合、学級集団の力で解決していく。その時、自分なりに根拠を持った発言でなければならない。全体学習で話し合いが始まるといろいろな考えが出てくる。友達の考えを聞き、自分の思いを出し合う中で、友達の考えに共感することもある。自分の考えを更に深めるきっかけになり、新たなひとり学習の追究が始まる場合もある。このように子ども達同士が“相互に刺激”し合い、響き合いながら学習をすすめていくことが必要なのである。また、互いのまなざしを共鳴するために、座席表の活用を取り入れている。自分と同じ考えや違う考えがわかるだけでなく、課題に対しての考えが何倍にも広がる利点がある。

本単元では『陸奥宗光』の足跡を調べ、常に大きな視野で日本の将来を考えていた彼の人物像を探った。子ども達が考えた『陸奥宗光』像は、[勉強熱心な努力家]・[家族や友達思いのやさしい人]・[負けず嫌いで頑張り屋]・[がまん強い人]・[苦労人]など肯定的な考え方が多かった。また、「重い肺の病気なのに、外務大臣になった。私なら真似できない。」「自分もこれから一生懸命勉強して何かしたい。」と考える子もいた。その一方で、「日清戦争を起こさせるために、王宮占拠事件を計画した。朝鮮の人達はどうなってもいいと考えていたから、ちょっと悪い人」や「言葉が巧みで、都合の悪い事は自分のいいように話した。だからずる賢い人」という視点で捉えている子もいた。(『陸奥宗光』新聞にも多く書かれていた。)歴史の人物学習では、人物を多面的に捉えることが重要である。また、その人物が生きた時代や社会背景は、現在とは違うという点もおさえながら、考えを深めることが大切だと考える。

3. 成果と課題

本単元では、和歌山市出身の偉人『陸奥宗光』を学習対象として位置づけ、学習をすすめた。幕末～明治時代の激動の歴史の中を生きた『陸奥宗光』の業績を追い続けることは、同時にその時代を知ることにつながった。明治維新後、日本は欧米諸国と肩を並べるために近代化を目指すのが、日本の外交史における『陸奥宗光』の業績は高く評価されている。特に、不平等条約の改正や日清戦争を勝利に導いた功績は計り知れない。また、その後の日露戦争～韓国併合～15年戦争へと続く時代に影響を与えたのも事実である。日露戦争以後の学習の中で、子ども達からも、『陸奥宗光』が活躍した時代と関連がある考え方が多く出されていた。『陸奥宗光』の業績や生き方について、とても興味を持ちながら調べ、まとめることができていた。子ども達同士の「まなざしの共鳴」という点を考えると、まだまだ不十分であった。ひとり学習を円滑にすすめられる課題の設定や、教師側からの発問をもっと工夫する必要があると考える。

歴史の調べ学習では、資料が大きな鍵となる。インターネットには多くの資料が満ち溢れているし、たくさんの書籍も出版されている。しかし、それらの資料は内容を読解するのが困難な資料が多く、言葉の意味も専門的である。また、著者の『歴史観』(史観)が、かなり反映されている資料(特に、近世史に多い)もある。このような資料を、どの程度まで子ども達に扱わせるかが課題である。教師側の支援として、子ども向けの資料を準備したり、わかりやすく解説したりする必要があると考えている。